

阿弥陀如来像

あみだによらいぞう【A-5】

鎌倉時代・14世紀
1幅 絹本着色
縦128.0cm 横54.4cm
修理 (株)岡墨光堂

濃紺の無地を背景に、蓮華を敷いて雲に乗り、両手は親指と人差指を合わせる来迎印というしぐさを示し、今まさに極楽浄土から目の前に現れ来った阿弥陀如来の姿を描いています。衣も肉身も全て金色として、衣には截金で精緻な文様を施しています。こうした単独の阿弥陀立像で、正面向きに来迎する形式の図は、鎌倉時代に浄土教団で盛んに制作され用いられました。

修理前



折れ部分

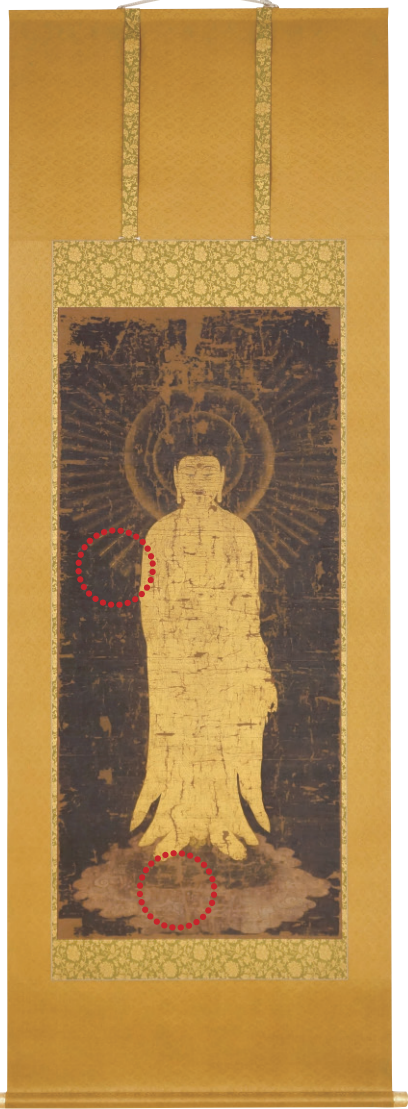
全体にわたり、横折れが見られました。



過去の修理の不具合

異質の補修裂が用いられていることにより、鑑賞の妨げとなっていました。

修理後



X線写真(丸が化仏)



赤外線写真

修理でわかったこと

赤外線やX線撮影を行なった結果、頭光の線の間に化仏が描かれていたことや、描き起こしの線よりもやわらかく流暢な下描き線、衣の裾の修正跡などが判明しました。また修理中には裏彩色が行なわれていたことも確認され、仏画制作の過程を知る上で興味深い多くの情報を得ることができました。

片口付深鉢形土器

かたくちつきふかばちがたどき【個人蔵】

重要文化財
縄文時代(前期)・前4000～前3000年
埼玉県ふじみ野市福岡 上福岡貝塚出土
1個 土製 高50.8cm
修理 (有)武蔵野文化財修復研究所
(財)住友財団・文化財維持修復事業助成金による修理



修理前



修理工程



解体

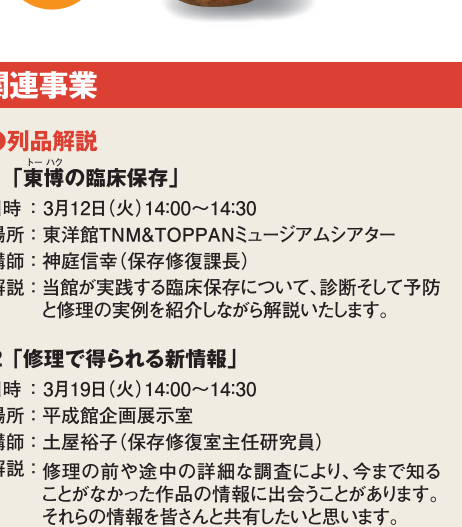
漆で接合した過去の修理箇所は粘着力が強い
ため、土器の破断面ごと剥がれないように水蒸気を当てながら粘着力を弱め、慎重に解体しました。



色合わせ

アクリル絵具で周囲のオリジナル部分と見分けのつく範囲で色合わせを行ないました。

修理後



やや上げ底の底部から胴部が外傾して立ち上がる大型の深鉢形土器です。口縁部には片口がつき、その両側には半円状の突起などが貼り付けられています。外面は斜行縄文や羽状縄文など多彩な縄文で飾られています。これらの器形と文様は縄文前期の関山式土器にしばしば見られる特徴です。また、この時期の土器は原料の粘土に繊維を混ぜることから繊維土器と呼ばれることもあります。

関連事業

<http://www.tnm.jp/>

●列品解説

1「東博の臨床保存」

日時：3月12日(火) 14:00～14:30
場所：東洋館TNM&TOPPANミュージアムシアター
講師：神庭信幸(保存修復課長)
解説：当館が実践する臨床保存について、診断そして予防と修理の実例を紹介しながら解説いたします。

2「修理で得られる新情報」

日時：3月19日(火) 14:00～14:30
場所：平成館企画展示室
講師：土屋裕子(保存修復室主任研究員)
解説：修理の前や途中の詳細な調査により、今まで知ることがなかった作品の情報に出会うことがあります。それらの情報を皆さんと共有したいと思います。

3「考古資料の修理と保存 —土器と鉄器を例にして—」

日時：3月26日(火) 14:00～14:30
場所：東洋館TNM&TOPPANミュージアムシアター
講師：川村佳男(保存修復室研究員)
解説：考古の収蔵品をより長く保存するためのトーハクの取り組みについて、土器と鉄器を例にご紹介します。

東京国立博物館 コレクションの保存と修理

平成25年3月12日(火)～4月21日(日) 平成館1階企画展示室

本特集陳列は今年で13回目を迎えました。このリーフレットでは、今回展示する作品の中から「広寒宮螺鈿合子」「片口付深鉢形土器」「阿弥陀如来像」「染付龍濤文提重」の4作品をご紹介します。漆工、考古、絵画、陶磁それぞれの修理方針、また各修理の工程で判明した製作技法や材料の特徴、修理を行なったことで明らかになった作品固有の情報などをご覧ください。一味違う展示をお楽しみいただければ幸いです。

広寒宮螺鈿合子

こうかんきゅうらでんごうす【TH-18】

中国・元時代 14世紀
1合 木製漆塗
高10.4cm 径32.5cm
修理 (株)目白漆芸文化財研究所

月の世界にあるという広寒宮を螺鈿技法で表わした華やかな作品です。青や赤、緑など発色の異なる貝片を薄く細かく成形し、楼閣や人物、唐草の文様を表わしています。人物の顔面部には曲面のある乳白色の貝片を用いて、立体的に見せる独特の技法をこらしています。また、蓋上面や側面に効果的に巡らせた金属の縊線や、貝片の表面に施されたごく細かい毛彫り文様も特徴的です。中国元時代の螺鈿の貴重な作例といえます。

修理前



内側は経年による木地の収縮のため、大きな亀裂が入り、漆塗膜の剥落が見られました。

修理後

顔まで細かく表わしているのね



修理工程



木枠とひご、クランプのような専用の道具を使って、剥離箇所の塗膜の圧着を行ないました。



貝片や漆塗膜が欠失した箇所は目立たないように補填と補彩を行ないました。



編集・発行:東京国立博物館 制作:DNPアートコミュニケーションズ
*ここに掲載した写真は修理施工者よりご提供いただいたものも含まれます。

染付龍濤文提重

そめつけりゅうとうもんざげじゅう【G-5293】

重要文化財
青木木米作 江戸時代・19世紀
1具 磁製
提高23.0cm 径23.0cm×22.5cm
重高14.0cm 径16.3cm×16.0cm
笠置達氏寄贈
修理 ますぶち工房

青木木米(1767～1833)は奥田頼川に学んだ京焼の陶工です。自らを「識字陶工」と称した文人でもありました。中国や朝鮮の陶磁器を広く研究し、煎茶道具を中心に作風は多岐にわたります。提重とは手提げの重箱で、小皿や徳利など宴会の器を持ち運ぶのに用いられました。木米の作品には瀟洒な器が数多く見られますが、重厚で堂々たる作風が特徴的なこの提重は珍しいといえるでしょう。濃淡を使い分ける高度な技術が用いられ、主題の龍濤文は中国明時代後期のいわゆる万暦染付になっています。

重部分



修理前



重の下段に破損後、接着した痕跡が見られました。また、過去の修理のオーバーペイントが劣化していました。

修理工程

解体



口縁を中心に、3片が外れました。

接着・色合わせ



もとの位置に戻し、樹脂を用いて再接着しました。接合部分は最小限の補彩に留めました。

虫喰いについて

この作品には、釉がぼろぼろと剥落した箇所が複数見られます。これを「虫喰い」と呼びます。中国明時代末期の景德鎮窯で作られた製品には、このような釉の剥落を生じたものが多くあります。焼成時に釉が粗製の素地にうまく付着しないことが原因で生じるものです。

日本の茶人たちはこれを「虫が食べた跡」に見立てて新たな価値を見出し、賞玩の対象としました。そして木米は、明末の万暦染付を模倣したこの作品において、「虫喰い」までも忠実に表現しているのです。



塗料の劣化について

かつて陶磁器の修理では、破損部分や亀裂部分を目立たなくするため、広範囲にわたり補彩を行なうことが主流でした。いわゆるオーバーペイントです。

これは、作品本来の姿を隠してしまうだけでなく、取り扱いにも危険を及ぼしかねないものです。近年、古い修理から数十年を経た作品に、塗料の劣化が確認されています。

当館の陶磁器の修理では、このようなオーバーペイントを除去し、本来の姿をできる限り正確に伝えるため、補彩は最小限に留めています。



提げ部分



修理前



オーバーペイントが劣化した箇所が見られました。

修理工程

塗料の除去



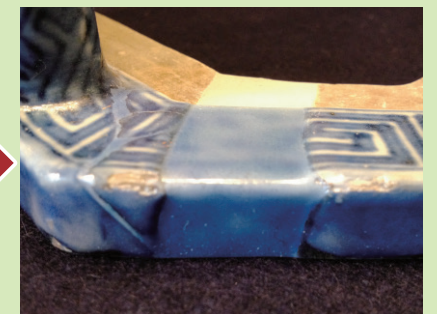
塗料を除去した結果、木片があらわれました。

樹脂で補修



木片を外すと、提げの形を損ねる危険があったため、解体しないことにしました。木片の上に樹脂を補填しました。

色合わせ



この部分はもともと存在しない部分であるため、文様の復元は行ないませんでした。染付の色調に合わせて、できる限り目立たなくするようにしました。

修理前



雷文の辻褄が合わない箇所もありました。

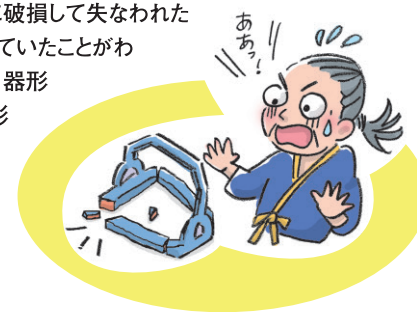
色合わせ



この箇所も上記の工程同様の修理を行ないました。

焼成時に起きた破損について

提げ部分の欠失は、用いられたいずれかの時期に破損して失われたのではなく、製作当初、窯から取り出した段階で起きていたことがわかりました。陶磁器は焼成時に加熱されることにより、器形に歪みが生じます。おそらく、提げ部分はこの複雑な形のため焼成時に負担がかかり、破損したものと推測できます。つまり、破損してズレが生じた部分に、木片を補って成形していたのです。当初、木片の上に漆を施した可能性があります。その後樹脂を塗り、上から染付に合わせて補彩をしたと考えられます。



X線写真

提げ部分を上から撮影した写真です。台部分の四隅に欠失があり、やきものとは異なる物質で補填されていることが確認できます。